People

「初めは寝込んでしまった」日本人看護婦のルワンダ体験

「こちらに着いたら水も電気もなく、道路に人があふれ、その人達の悲惨な姿を見てショックを受けたのと、水浴のために風邪をひいてしまい、初めの三日間は寝込んでしまいました」

と語るのは、約三十万人のルワンダ難民が避難生活を送るザイール・ゴマ近郊のキブンバ・キャンプで活動した日本人看護婦の山田緑さん(29)。ルワンダ難民救援には、自衛隊以外にも様々な非政府組織(NGO)が活躍しているが、山田さんはアジア医師連絡協議会(AMDA、本部・岡山市)の一員として派遣された。

山田さんの仕事は、現地人の看護婦と一緒に診療所の中を回って難民の健康状態や病気の症状を確認すること。朝八時半から午後五時まで赤痢、髄膜炎、マラリアなどに苦しむ一日約三百五十人の患者を日本人医師一人と山田さん、現地人看護婦四人で診た。

現地では水や電気の問題もさることながら、治安の悪さに怯えながらの毎日だったという。

「ゴマ市内の宿舎のすぐ近くでザイール兵が民家を襲って発砲する音が聞こえ、その時が一番怖かった。同僚二人ともう帰ろうかと震えていました」

約一カ月間の活動を終えて帰国した山田さんの感想は、「疲れましたが、充実感があった。看護婦をやってきてよかったと感じました。AMDAは一生続けていきたい」。

撮影　飯田　勇